ネパール中央区における都市・農村の生活様式とその変容

西田　裕子

キーワード：ヒマラヤ山岳地域，丘陵地帯，タライ，カトマンドゥ，チベット，インド

1．研究の目的と方法

本論文は，和辻哲郎の『風土』，安田喜憲の『森のこころと文明』などの風土論，および富岡儀八の『塩の道を探る』，立川武蔵の『曼荼羅の神々』『ヒンドゥーの神々』，スイスの地質学者 Toni Hagen の『ネパール』などの著書に依拠し論述を展開する。

また，ネパールの「土」に着目し，ネパールの人々が古代より生活の基盤としてきた土壌がどのようなものであるかを分析するとともに，人々がどのような意識をもって自然と向かい合い，「自然」と共存してきたのかを，歴史や神話，人々の信仰のあり方，といった視点から考察する。

さらに，人々の生活事例や移動事例を通して，高度と自然環境に応じた生活様式のあり方，および1950年代の近代化以降，外国援助による開発がネパールの人々にどのような影響を与えてきたかについて考えるとともに，これまでのネパールの人々の自然観から環境保全のあり方について考えることを目的としている。

本研究は，文献を用いて論述を展開するとともに，2007年4月，5月，10月に行ったネパール現地調査で収集した資料，採取土壌，および聞き取り調査の結果を用いて，本論文の目的に関する分析，考察を行った。

2．地理的位置とその特徴

ネパールの地理的位置は，西は東経80度，東は88度であり，緯度的には亜熱帯地方に位置する高い山岳の国である。

地勢的には，東西に帯状に広がる北部のヒマラヤ山岳地域，中部の丘陵地帯，南部のタライ地方の3帯に大別される。ヒマラヤ山脈の南側斜面がヒマラヤ山岳地域で，気候は乾燥，寒冷を特徴とする。南部のタライ地方は，北インド平野にそのままつながる平地で，その気候は亜熱帯的であり，都市や工場が多い。タライ地方の北側にはチューリア丘陵が東西に走り，そのすぐ北側にマハバーラト山脈が寄り添うように連なっている。これらの山系と北部のヒマラヤ山岳地域にはさまれているのが丘陵地帯である。この丘陵地帯の気候は温暖で，カトマンドゥ盆地，ポカラ盆地などの人口密集地がある。

これらの3地帯は文化的にもそれぞれ特徴があり，ヒマラヤ山岳地域はチベット型，丘陵地帯がネパール型，タライ地方がインド型と，概括的ながら一応の特徴付けができる。

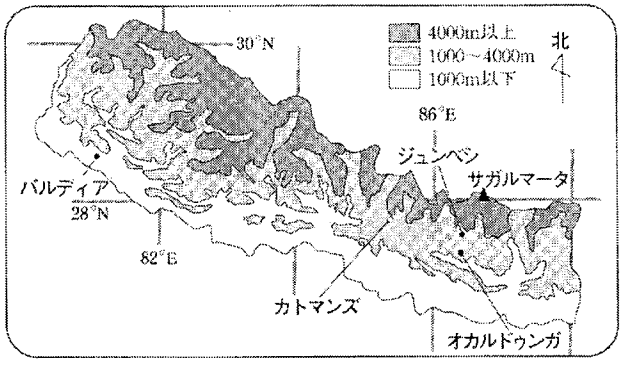


図1　標高によるネパールの地域区分
（山本・土屋，2000）

3．民族・文化圏の特徴

（1）民族的多様性

ネパールの人口は，さまざまな文化や言語をもって四方八方から入り込んだ民族によって構成されている。その代表は，西・南から入ってきたインド・ヨーロッパ語系の言葉を話す人々と，北・東からやってきたチベット・ビルマ語系の諸言語をもつ人々である。

ネパールは2つのまったく異なる言語系統の接点にあり，諸民族は独自の生業形態をもって異なる高度に適応しているが，この垂直分布は水平分布とかなりの程度相関し，宗教や社会制度の相違ともかかわっている。

ネパール語には，ある人が生まれつきどんなグループに属するかを表す「jaat（ジャート）」という言葉があり，いろいろな民族の間でも広く使われている。この「jaat」の語の用法には，ネパールの人々のアイデンティティの焦点の違いと関連した多面性がある。たとえばネパール語を母語とする人々に「Tapaainko jaat ke ho？（あなたのジャートは？）」と聞けば，Kami（鍛冶屋）やDamai（仕立屋）といったカースト名で返ってくる。一方，同じ質問をチベット・ビルマ語系の人々にすると，その答えはGurung（グルン）やThamang（タマン）といった民族名になる。これは，それらの民族が政治権力や社会的圧力の下でヒンドゥー化してきたことの一側面であるが，他方，社会範疇への帰属の焦点がどこにあるかという点とも関わっている（石井，1990）。

南はインド，北はチベットという大文明にはさまれ，さらに東アジアと西アジアの接点に位置しているネパールは，故郷を追われたり捨てたりした人々が生きる場所を求めて移動してきた場所でもある。ネパールをとりまく過酷な自然環境は，外部からの侵攻に対して自然の防壁ともなった。一部の先住民をのぞいて，ネパール人の多くはこのような移住者たちの子孫である。彼らの故郷，移動先，移動時期は多種多様であり，そのことが複雑な民族構成を生むこととなった（結城，2000）。

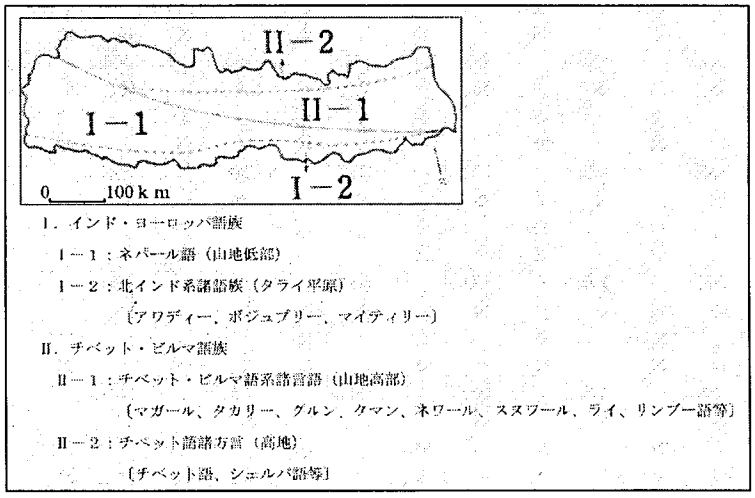


図2　ネパールの言語系統概略（石井，1990）

（2）ネパールの「塩の道」

一部の地域を除いて塩を産出しないネパールでは，古くからチベット⇔ネパール，ネパール⇔インドにおける塩の交易が行われてきた。この交易を成り立たせていた基盤が塩と穀物の交換であり，この交易の道は，ネパールを起点にチベット⇔ネパール⇔インドを結ぶ文化の道ともなった。

多民族国家ネパールの歴史は，カトマンドゥ盆地を中心に展開されてきた。カトマンドゥ盆地には，ヒンドゥーと仏教が混淆し，それぞれの神々を同じように祀っている。そこでは，人々がヒンドゥー教徒，仏教徒といった枠組みを越えて，それぞれの寺院に礼拝し

ている姿を見ることができる。また，仏教寺院の中にヒンドゥー寺院があることや，仏教の諸仏とヒンドゥーの神々が一緒に祀られていることもある。カトマンドゥは，そのようなヒンドゥーと仏教の融合を見ることができる場所であり，それは北のチベットと南のインドの文化的融合を意味するものである。

このように，ネパールにおける「塩の道」は，チベットとインドの２つの生活圏と文化圏がせめぎあい，そして結びつく場所であり，双方が重なり合う場所には，ネパールの人々の生活圏や文化圏があったともいえる。そして，ネパールの人々は，それぞれの民族の独自性を保ちながらも，この２つの地域の生活圏や文化圏を融合させる役割を担ってきたといえる。

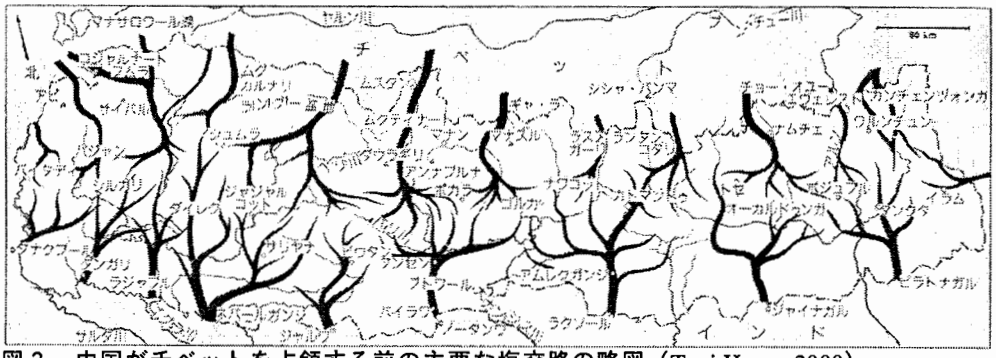


図３　中国がチベットを占領する前の主要な塩交路の略図（Toni Hagen,2000）

４．ネパールの土壌

（１）耕して谷に至る

ネパールの大きな山々の中腹や尾根上には，村落と段々畑がある。深い谷をへだてて遥かに広がる山腹の風景は，尾根から谷底まで切れ目なく続く段々畑と棚田，そのあいまに点々と見える人家である。もともとネパールの山地の村は山の上の方にあり，しだいに高度の低い谷底へ拓いていくようになった。

ネパールの地形は，川岸沿いの土地は急斜面である一方，山腹や尾根近くの方が緩斜面で農耕に適している。また，谷の低地や川沿いにはマラリアがはびこっていたため，ネパールの丘陵地帯では，山腹から尾根にかけて村落が発達した。ネパールの山地は耕地で覆われているが，これは耕して天に至ったのではなく，谷に至ったのである。

ネパールの３大河川である東部のコシ，中部のガンダキ，西部のカルナリの３水系は，いずれもチベットを水源とし，ヒマラヤ山脈を横切ってネパールを貫流する。やがてそれらの河川は，インドのヒ

表１　ネパール土壌分類

地形	地名	砂 (%)	シルト (%)	粘土 (%)	土性	標高
盆地周辺	Tinchule	26.6	39.6	33.8	軽粘土	1350m
	Duwakot1	51.6	27.0	21.4	粘土質ローム	1314m
	Duwakot2	91.3	4.6	4.1	砂	1314m
	Satungar	7.0	42.6	50.4	重粘土	1380m
	Nalinchowk	70.9	19.4	9.7	砂質ローム	1341m
	Bhimphedi	75.2	17.8	7.0	砂質ローム	1128m
	Pame	34.1	37.3	28.6	軽粘土	881m
谷	Gairigaun	66.7	19.0	14.3	砂質ローム	554m
	Lapang	67.9	24.8	7.3	砂質ローム	567m
山地	Cheesfactry	76.8	11.2	12.0	砂質ローム	1857m
	Bhalcri	51.0	19.0	30.0	軽粘土	1603m
	Dhulikhel	52.3	21.5	26.2	軽粘土	1650m
	Talakhu	61.0	17.3	21.7	砂質粘土ローム	1903m
	Chisapani	13.6	47.7	38.7	シルト質粘土	2171m
	Saarkot	53.3	30.5	16.2	粘土質ローム	1583m
平野周辺	Khokla	80.0	14.2	5.8	砂質ローム	468m
	Dhukwabas	72.6	13.5	13.9	砂質ローム	423m
	Phatalaya	75.7	15.5	8.8	砂質ローム	193m
	Bingunj	70.8	17.2	12.0	砂質ローム	60m
	BhujauliTaragaw	39.1	43.7	17.2	粘土質ローム	100m

ンドスタン平原を経て大河ガンガーに流れこむ。これら３水系の水源は，ヒマラヤ山脈の氷河や雪の融水とネパール全土の降水を集めて，カンガーの水の大きな供給源となっている。さらに，ヒマラヤ山脈の南面に位置するネパールは，場所によっては年間降水量が 3000mm 以上となり，そのうちの 80％にあたる 2500mm 内外の降水が，６月～８月のモンスーン期に集中する。このようにして供給される水と豊かな土壌によって，ネパールの耕地は成り立っている。

小山・竹原（1996），2007 年調査結果より作成

（２）カトマンドゥを中心とする土壌分析

2007 年の調査でネパール国内の 19 ヵ所から採取した 20 種類の土壌を，４種類に分類した。土壌を採取した土地は，いずれも厚い土層を成しており，その土層の上にはみごとな作物をが生育しているところが多かった。

FAO/UNESCO の『SOIL MAP OF THE WORLD』によると，ネパールの土壌を大きく分けると，①リソソル，カムビソル，ランカーといった，薄い土壌と発達途上の土壌が入り混じったヒマラヤ山岳地域，②発達途上の土壌，カムビソルを基盤とした丘陵地帯，③礫の混じった薄い土壌，ランカーを基盤としたシワリーク丘陵，④河川堆積物によって生成された若い土壌，フルビソルのタライ平原，といった４つに分類される。

このように，ネパールの土壌を巨視的に見ると，礫の多い未熟で未発達の若い土壌といった印象が強くなるが，人々の生活する集落に分布する土壌は，粒子の細かい肥沃な土壌が多く見られた。また，20μm 以下の粒子の細かいシルトや粘土には，さまざまなミネラルが含まれており，栽培作物を育てるのに大きな役割を果たしている。見方を変えれば，人々は肥沃な土壌のある場所に集落を作り，今日まで生活を営んできたといえる。

ネパールでは，ヒマラヤの氷河が融氷水となって今も流れ出ている。ネパールの土壌に含まれるシルトや粘土といった細かい土壌粒子は，この融氷水に混じって運ばれた氷河レスが谷間の河岸に堆積した後，風に吹き上げられて高い場所に運ばれたものと考えられる。

2007 年の調査で採取した土壌の分析結果は，比較的深い場所から土壌を採取した数ヵ所以外は，氷河レスによって生産された細かい土壌粒子が多く含まれているものであるといえる。

例えば，カトマンドゥ盆地の Satungar の重粘土層や Duwakot２の砂層は，盆地が湖だったころに生成したものと考えられるが，地表近くに堆積しているローム層の細かい土壌粒子は，河川や風によって運ばれた氷河レスの可能性が高い。また，Chisapani や Dhulikhel, Sarankot などの山の頂上，その頂上から少し下ったところにある Cheesfactry や Bhakri, Talakhu などの山の斜面の階段耕地に堆積した細かい土壌粒子は，近くにそのような細かい土壌粒子を運ぶ河川のないことから，風によって運ばれた氷河レスと考えることができる。このように，ネパールの人々の生活の基盤となる土壌には，ヒマラヤの厳しい自然環境の中で育まれた豊かな恵みが隠されているのかもしれない。

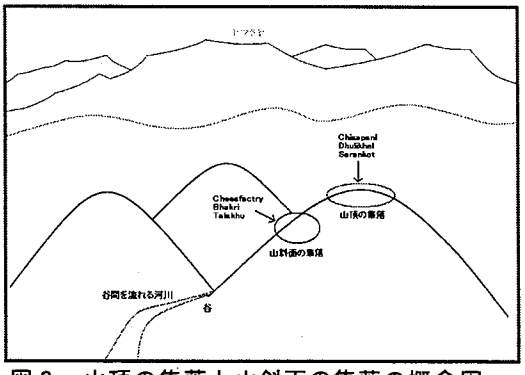


図３　山頂の集落と山斜面の集落の概念図

５．中央開発区の人々の生活

ネパールの経済開発戦略による地域区分から中央開発区を調査地域として選び，人々の生活についての聞き取り調査を行った。そして，人々の生活の様子を北部のヒマラヤ山岳

地域，中央の丘陵地帯，南部のタライの３地域に分類し，各地域の生活事例として示す。

（１）ヒマラヤ山岳地域（Marbin での人々の生活とヤクや山羊を飼う人々の話）

首都カトマンドゥと Kodari を結ぶ道路沿いに，Barabise という町がある。古くから交通の要所として栄えたこの町では，Kodari 行きとカトマンドゥ行きのバスが町の端の数ヵ所から頻繁に運行されている。この Barabise から北上した道路沿いにある村，Chaku の東側の石段と坂道を登って１時間ほど歩くと，Marbin という村に着く。

Marbin に住む人々の多くは Sherpa であり，その他には Bisokarma（道具を作る人）がいる。Bisokarma の人々は，農作業道具作りや大工仕事などすることで Sherpa の人々から農作物をもらい，生活している。村に５クラスまでの学校はあるが，病院はない。そのため村の人々は，必要に応じて Chaku にある病院まで下りて行かなければならない。

Marbin では，稲，黒い米，ソバ，綿，とうもろこし，じゃがいもを主に栽培している。その他，大根，キャベツ，カリフラワーなどの野菜類の栽培も行う。

村では若い男性がカトマンドゥやポカラなどの都市へ出稼ぎに行くことが多く，女性や高齢者，および子どもたちが畑仕事をしている。

ヤクや山羊のたくさんいる場所が，この村より山の方にある。そこに村はないが，ヤクや山羊を飼っている人が住んでいる。そして，麓の村から食事を運ぶ人と交代でヤクや山羊の世話をする人が，その場所を往来する。山羊を飼う人は，11 月から３月の寒い時期になると，山羊を連れて麓の村へ下りてくる。

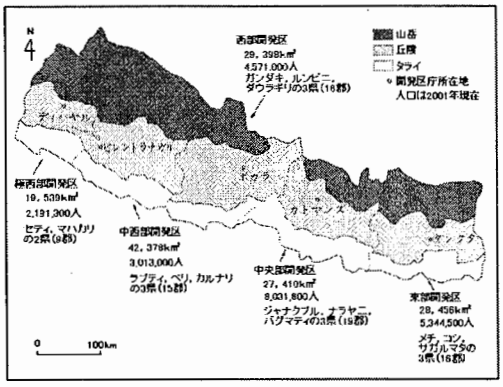


図４　ネパールの経済開発区
井上（1990）より作成

（２）丘陵地帯（Newar の村 Chitapoal）

カトマンドゥ盆地の東にある Nalinchok のなかに，Chitapoal という村がある。この村には，道路沿いに新しい建物が並ぶ新村と，新村の北側に昔からの家並みの残る旧村がある。

Chitapoal では，米作りをはじめ，とうもろこし，小麦，ソバ，シコクビエなどの穀物類，カリフラワー，オニオン，きゅうり，ニガウリ，オクラ，ガーリック，および青菜などの野菜類，ササインゲンやササゲ豆，Mashang（豆の一種），ヒヨコ豆，そら豆などの豆類など，様々な作物栽培を行っている。栽培される豆類の多くは，ネパール料理として有名な Daalbhaat（daal は豆，bhaat はご飯の意）の材料となっている。

Chitapoal の隣村，Daujuyougaw には送電施設があり，そこから Chitapoal へ電気が供給されている。村に送電施設をつくってもらうために，Chitapoal と Daujuyougaw の人々は，そこに住む人々から多くのスタンプ（署名と捺印）を集めた。送電施設の建設は，それを希望する地域住民のスタンプの数の多い地域から優先的に行われるという。

この村に調査に行った 2007 年 10 月 20 日（Vikuram 暦 2064 年７月３日）は，ネパールの最大の祭り Dasain の最も重要な日の９日目（ネワールの儀礼では 11 日目）にあたり，各家庭で pujaa（供儀）が行われていた。この pujaa のために多くの人々が村に帰って来ていた。ネパールの人々は，Dasain などの大きなお祭りのときに友人たちと会い，カードゲームや凧揚げ，ブランコ，フットボールなどを行ったりするという。

（3）タライ（Phatalaya での人々の生活）

Parsa 野生動物保護区内の Amlekhganj から約 10km 南下した道路沿いにある村，Phatalaya は，政府の道路建設によって 1953 年頃にできた村である。村にはヒンドゥー教徒が多く，村人の約 40％が丘陵地帯の Ramechhap から，他の約 60％は周囲のさまざまな場所から来たという。この村には，Brahman と Chhetri が多く，他には Newar，Thmang，Lama がいる。

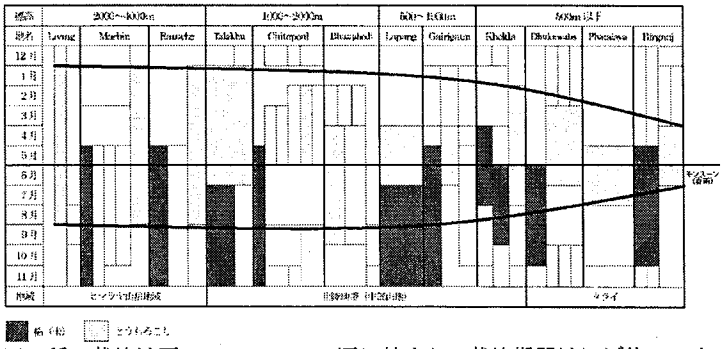
Phatalaya では，雨季の 5 月～10 月に販売を目的としたとうもろこし，マスタードを作るだけで，水が不足する乾季の 11 月～4 月には，何も栽培しない。この周辺の人々は，主に飲食店などのビジネスで生計を立てているが，生活の足しとするための野菜類の栽培を各家庭で行っている。また，カトマンドゥなどの都市へ出稼ぎに行く人もいる。

（4）高度と自然環境に応じた生活様式

ヒマラヤ山岳地域の高地からタライの低地までの人々の生活は，さまざまな形態をとっているが，程度の差はあるものの，どの地域でも可能な限り，その土地でできる作物を栽培している。また，近年の道路建設に伴って，道路に沿った山の谷間の低地に，新しい町や村がつくられていることが多い。古くからある村は，山の斜面や頂上にあることが多く，作物栽培や牧畜を生活の糧としているところがほとんどである。

一方，近年になってつくられた町や村に移住してきた人々は，飲食店やホテルなどのビジネスを中心とした生活をしているが，自分たちの小さな畑で自分たちが食べるための作物栽培を行ってもいる。近代化以降，町や村における人々の生活は変わりつつあるが，人々の暮らす地域の高度や自然環境に応じた生活様式が，今もなお営まれている側面も見ることができる。

表 2　中央開発区の調査地域における主な栽培作物



※　稲の栽培は夏のモンスーンの頃に始まり，栽培期間はほぼ均一である。一方，とうもろこしはどの地域でも栽培されており，稲作の行われない乾季に栽培されていることが多い。また，高度差による気温の違いが栽培期間に影響を与えている。とうもろこしの栽培期間は，気温の低い高地では長く，気温の高い低地では短い。

6．人々の移動類型とその事例

ネパールでは，古くからチベットとネパール，ネパールとインドの間における塩の交易が行われてきた。この交易の道である「塩の道」は，現在のネパールにおける人々の移動とも深く関わっており，ネパール国内を移動する人々はこれを利用している。また，ネパールの主要道路は，塩の道と一致するものが多い。

人々の移動を概観すると，ヒマラヤ山岳地域，丘陵地帯，タライの 3 地帯における人々の移動パターンを 10 種類に分類することができる。本事例は，ネパールの経済開発戦略に

よる地域区分の中部開発区を対象とし，人々の移動類型に関する聞き取り内容をまとめたものである。

この事例をもとに移動する人々の類型を図式化し，都市と村を移動する人々とその関係を明らかにする。また，移動類型の単一または複合パターンによって事例を図式化し，都市と村の関係を分析した。

（1）村事例（丘陵地帯の村 Lpang とヒマラヤ地域の村 Sertung の関係）

カトマンドゥの北東に位置する丘陵地帯の村 Lpang は，約 40 年前にこの村近くの山にある Marpaka，Karigaw，Katunje，Achenatar，Achenani などの村から下りてきた人たちによってできた村である。彼らのもといた村は，Lpang より土地が狭く山が険しかったため，農業に適したよい土地を求めた人々がこの地にきて住みついたという。村の子どもたちは Gairigaun にある学校に通っている

この村では１月～３月に気温が－10℃ぐらいまで下がるため，作物を育てることができない。この農作業を行わない時期，Lpang から約 120ｋｍ離れた標高約 4000m の高地にある村，Sertung から山羊を連れて人々が麓の村に下りてくる。

Sertung の人たちは，Lpang で５日～10 日ほど滞在した後，Lpang 南部の町，Dhading へ出稼ぎに行く。そのなかには，カトマンドゥやポカラまで行く人もいる。

ほとんどの Sertung の人たちが町へ行った後，約 400 頭の山羊と山羊のその世話をする６人の男性，および彼らの犬だけが Lpang に残る。Lpang で飼っている山羊は 100 頭ほどで，Sertung の人たちが村に山羊を連れてきても困らない。

Sertung の人々は Lpang へ降りてくると，畑を借りてそこで山羊たちと一緒に寝る。Sertung の人たちは滞在中，Lpang の人たちから作物を買うので，Lpang の人々は，Sertung の人たちに土地を貸した報酬を求めない。また，山羊の餌が畑の草だけでは足りないため，Lpang の人たちの採ってきた餌を Sertung の人たちが買う。これは，Lpang の農家の冬の仕事となっている。Sertung の人たちが連れてきた山羊が草を食べるので，Lpang の人たちは冬の間に生えた畑の草を刈る手間を省くことができる。Lpang では，３ヵ月～４ヵ月の間，作物を作らないが，それまでの間に必要な分を作ることができる。

（2）個人事例（Pemma Tamang 氏と Sita Tamang さん）

Pemma Tamang 氏（56 歳）は，チベット（中国）との国境近くの村，Living に生まれ育つ。彼は 15 歳のとき，インド北部の町 Darjeeling 近くの村へ１人で出て行った。彼は，20 歳のとき Darjeeling へ行き，Sita Tamang（50 歳）さんと出会い，結婚した。Sita Tamang さんはヒマラヤ山岳地域の村，Wokhaldunga で生まれ育ち，彼女が 10 歳のときから両親とインドの Darjeeling で暮らしていた。彼女が Pemma Tamang 氏と結婚したときは，まだ 14 歳だった。

Pemma Tamang 氏は，町でポーターやバスへの荷積みなどの仕事をして働いた。子どもが生まれて家族が増えた 23 歳のとき，Nagalain へ家族全員で行き，そこで畑を借りて生活した。彼らは畑の収穫の 50％を土地代として払い，残り 50％を自分たちの収入としていた。Nagalain へ移ってから後，生活はよくなったという。

そして，３年前の 2004 年に，Pemma Tamang 氏は故郷の村，Living へ帰って来た。他の国での人間関係がネパールより難しいと感じていた彼は，ずっと故郷の村に帰りたいと考えていたという。現在，Pemma Tamang 氏は，Living で畑を借りて暮らしている。畑の収穫の 50％を土地代として払い，残り 50％を自分たちの収入としている。また，村近くの町，Kodari へ行って仕事をすることもある。政府の道路建設によって最近できた新しい町である Kodari には，彼が子どものとき人が住んでいなかったという。

Pemma Tamang 氏は，10 人の子どもたちのうち，8 人と一緒に暮らしている。23 歳の息子と 24 歳の娘は，インドで働いている。また，24 歳の娘は，彼女が 18 歳のときにインドに来ていたネパール人の Tamang と結婚した。Pemma Tamang 氏は，豊かではないが，故郷の村で家族と一緒に暮らす今が一番幸せだという。

村事例を見ると，人々の移動の範囲は，丘陵地帯を移動高度の境界としていることがわかる。このことは，あとに示す個人事例ともほぼ一致する。このような移動現象が見られる理由として，ネパールの各民族集団が同じ標高の範囲を好んで住んでいたこと，および各民族集団の生活様式と関係していることが考えられる。また，村事例に見られる，家畜を飼う人々と作物栽培を行う人々の相互扶助関係は，かつてジュンベシ谷（ヒマラヤ山岳地域にあるシェルパの居住地)の人々とグルンの羊飼いたちとの間にあった互酬的関係(古川ほか，2000）と似ている。このような相互扶助・互酬的関係は，ネパール中央部のマハバーラト山脈に暮らすチョオバオンと南部低地に暮らすタルーとの物々交換（橘，2000）などにも見ることができる。

1950 年代の近代化以降，ネパール諸民族の生活様式は変わりつつある一方，今日でも村事例に見られるような，人々の相互扶助・互酬的関係が存在することも確かな事実として捉えることができる。

また，村を離れて都市へ働きに行く人々，よりよい環境を求めて移住する人々，ある一定期間だけ村を離れて移動する人々など，さまざまな事例があるが，それぞれの人々が所属する集団の中での結びつきが強いということを，を各事例から読み取ることができる。

都市へ出てもなお，故郷の村は残され，人々は都市と村の往来を続けている。また，冬の間だけ高山から降りてくる人々と麓の村の人々との相互関係は，冬の間に出稼ぎをする人々が再び故郷の村へ帰れることを可能にしている。

さらに，Pemma Tamang 氏のように，若いときは村を離れて出稼ぎに行っていた人が，歳をとってから故郷の村に帰って生活しているというケースも少なくない。故郷自然の恵みと厳しさの中で，人々は支えあわなければ生きていけない。そのような厳しい生活環境が生み出した人々の結びつきが，故郷を思う人々の心の基盤となっているのかもしれない。

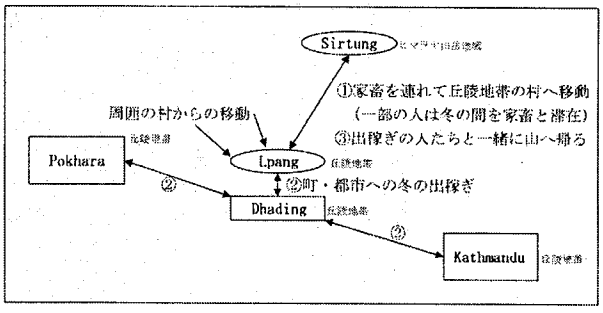


図 5　Lpang と Sertung の関係

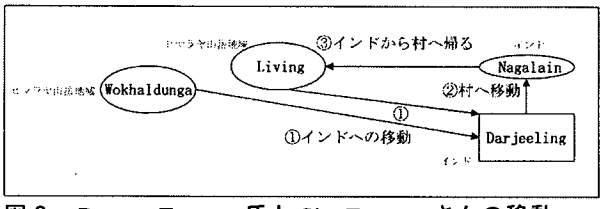


図 6　Pemma Tamang 氏と Sita Tamang さんの移動

7．開発と社会の変化

開発に伴って,ネパールの行政と社会も大きく変化している。ネパールの森林政策の変遷により,以前は森林の管理には国が直接関与することが少なく,民族集団による伝統的な管理に任されていたものが,1957 年にごく一部の私有林をのぞき,すべての森林が国有林とされた。国有林では地域住民の生業に即した適切な管理をすることができず,そこに人口の増加も伴って大規模な森林破壊を引き起こすことになった。

1993 年に森林法が改正され,政府は巨額な援助資金を背景に,住民を森林から排除するという従来の森林保護政策から,住民参加によって森林を保護育成するという政策に改めた。しかし，このコミュニティ・フォレストという形態でとられた森林組合を促進する政策は,森林を管理していたそれまでの秩序形態を崩していくことに変わりなかった（古川ほか,2000)。

氾濫する開発援助は,ネパールの人々の間に,ネパールは弱小で貧しい国だという劣等国のイメージを増幅させてきた。そして,そのイメージは先進国との位置関係によって生まれたものである。

ネパールの文化人類学者 D.B.Bista（1991）は,ネパールが「最貧国シンドローム」に陥っていると指摘し,貧困を取引の材料に使っている国の状況を憂慮した。愛知県立大学の古川彰は,外国人たちが善意や熱意でネパールのためにやったことでも,結果として予想できなかったような様々な問題が生じる複合的状況のことを,登山家のヒラリーにちなんだ「ヒラリー・シンドローム」という言葉で表現した。

開発は直接的には経済発展や貧困の撲滅を目標としているが,同時にさまざまな社会と文化の変容を促している。そして,環境に規制されながらも環境を利用してきたネパール諸地域の人々が,開発援助という特殊な経済状態に支えられながら,行政機構や学校制度,市場経済などの世界システムに巻き込まれ,それまであった価値観を変えつつある。

このように，開発をめぐる問題は多種多様であるが，人々は開発援助によって増幅させられた「貧しい国」のイメージを払拭し，そこで生きる人々の生活の場で失われていくものにも目を向けていくことが必要である。

8．ストゥーパの目は何を語るか

カトマンドゥの東の丘に聳え立つスワヤンブナートのストゥーパには，ブッダズ・アイと呼ばれる目が描かれている。いつ，この丘にスワヤンブナートが建てられ，ストゥーパに目が描かれたのかを,はっきり知ることはできないが,少なくともスワヤンブナートは,カトマンドゥ盆地の長い歴史のなかに存在してきた。そして,ストゥーパに描かれた目は,近代化が進められるネパールの様々な場所で，今も見ることができる。

例えば，パタン東にある「アショーカ」のストゥーパは，建設された年代はわからないが，古い時代のものであることには違いない。この仏塔の頂の平塔は，19 世紀に付加されたものであり，それに目が描かれたのが，ここ 30 年以内のごく新しい時期である（石井，2003)。この「アショーカ」のように，新しく目が描かれたストゥーパは，最も開発の進められているカトマンドゥのいたるところで見ることができる。

かつて人間を見つめて石に変えるメドゥーサの目は，自然を破壊する人間を見つめる神々の目だった。古代の人々を見つめるメドゥーサの目は，人々を取り囲んだ自然の神々であり，人々は自然の神々に見つめられて生きてきたのである。しかし，近代ヨーロッパ文明の開幕とともに,メドゥーサの霊力は完全に断たれ,本来は神であったメドゥーサは,気持ちの悪い化け物として世界中に知れ渡ることとなった。そして，人間は自然への畏敬の念を喪失し，自然破壊は激しく進むこととなった（安田，1996)。

メドゥーサと同じく，巨大な目と耳をもって，かつて人々を見つめていたイースター島のモアイは，1300～1200 年前から始まった激しい森林破壊（J.R.フレンリー，1991）のために作られなくなったとされている。人口の増大による農耕地の拡大，建築材，薪，船をつくる材料として森が破壊されたため，モアイを運び，立てるための木材が切り出され，家畜が若芽を食べつくし，森の再生を不可能にした。そして，森を食いつぶしたとき，その文明は崩壊したという。

かつて自然の神々は，人間の身近なところにあり，人々の畏怖と畏敬の対象であった。

しかし，自然破壊の侵攻とともに，神々はその姿を変えられ，狭い建物の中に押し込められ，必要に応じてその建物の扉が開かれるようになってしまった。そして，人々が森を切り開き自然を破壊する時，その行き過ぎを食い止める役割を果たしてきた神々の目は，今日の世界では感じることができなくなってしまった。

そのような状況にもかかわらず，ネパールのいたるところでは，今日でもこの神々の目を感じることができる。それは，ストゥーパに描かれた目に限らず，人々が神の宿る「座」や「場」として神聖視している山々，および木々や水場などにも見ることができる。また，厳しくも恵みをもたらす自然の懐に抱かれている村々においては，自然そのものから神々の息づかいを感じ取ることができる。さらに，近代化にともなう開発によって，もっとも自然が破壊されているカトマンドゥ盆地では，シンボルとしての神々の目が一番多く見られるといっても過言ではない。

開発されたカトマンドゥ盆地は，今日でも「神々の像」によって占拠され，人々は常に神々に見つめられながら生活している。その最大の象徴ともいえるスワヤンブナートのブッダズ・アイは，盆地の小高い丘の上から人々を見つめ，人々に警鐘を鳴らし続けている。

このストゥーパの目が人々の前から姿を消すとき，ネパールで育まれてきた人々の自然への畏怖や畏敬の念は失われるのかもしれない。それは人間の内面からの崩壊を意味するものであり，厳しい自然環境とその自然のもたらす豊かな恵みによって生きてきた人々の生活の場を失うことでもある。そうならないためにも，ヒマラヤの麓に聳え立つストゥーパの目は，ヒマラヤの自然の懐に抱かれて生きる人々を，これからも見つめ続けていく存在であらねばならない。

写真　スワヤンブナートの
ブッダズ・アイ

9．おわりに

ネパールの人々は，多様な自然環境の中で高度と風土に応じた生活を営み，狭い地域に多種多様な民族が住んでいるにもかかわらず，異なる民族が衝突することなく，住み分けをしてきた。また，インドとチベットの文明に挟まれ，東西アジアの接点に位置するネパールは，故郷を追われたり捨てたりした人々が移動してきた場所でもあり，ネパール人の多くはこのような移住者の子孫である。そして，彼らの故郷，移動先，移動時期が様々だったことが複雑な民族構成を生んだ。また，北部のヒマラヤ山岳地域，中部の丘陵地帯，南部のタライの３帯に大別されるネパールの地勢は，文化的な境界にもなっている。また，ネパールの「塩の道」は，チベットとインドの生活圏と文化圏が出会う場所であり，その双方が重なり合う場所にネパールの人々の生活圏や文化圏があった。人々は，各民族の独自性を保ちながらも，２つの地域の生活圏や文化圏を融合させる役割を担ってきた。

FAO による分類から見たネパールの土壌は，全体的には礫の多い未熟で未発達の若い土壌とされるが，人々の生活する集落には，粒子の細かい肥沃な土壌が見られる。この細かい土壌粒子は，ヒマラヤの氷河によって生産された氷河レスである可能性が高い。粒子の細かい土壌には，さまざまなミネラルが含まれ，作物栽培に大きな役割を果たしている。

ネパールの古い村は，山の斜面や頂上にあることが多く，農耕や牧畜を生活の糧としている。一方，近年つくられた道路沿いの町や村の人々は，ビジネス中心の生活を営むが，自給的な作物栽培も行っている。近代化以降，人々の生活は変わりつつあるが，人々の暮らす地域の高度や自然環境に応じた生活が今も営まれている。そして，ネパールにおける

人々の移動範囲は，丘陵地帯を移動高度の境界としている。このことは，各民族集団が好む標高の範囲や生活様式と関係している。また，牧畜民と農耕民との間に見られる相互扶助・互酬的関係は今日も存在している。そして，所属集団の中での結びつきが強いネパールでは，村から都市へ出ても故郷の村が残され，人々は都市と村を往来している。さらに，若い時に村を離れて出稼ぎに行った人が，歳をとってから故郷の村に帰って生活するケースも少なくない。厳しい生活環境が生んだ人々の結びつきが，故郷を思う人々の心の基盤となっている。

ネパールは，開発援助という特殊な経済状態に支えられながら，行政機構や学校制度，市場経済などの世界システムに巻き込まれ，これまでの価値観を変えつつある。人々は「貧しい国」というイメージを払拭し，そこで生きる人々の生活の場で失われていくものにも目を向けていくことが必要である。また，ネパールの人々は，神々の棲むヒマラヤに見立てた身近にある山や丘に神々の住処をつくり，自然の神々と生きる生活の場をつくってきた。そして，神々に見立てた自然のもの，およびシンボルとしての「神々の像」やストゥーパなどに描かれた神々の目が，開発による自然破壊の行き過ぎを食い止める役割を果たしてきたといえる。このように，ヒマラヤの厳しくも恵みある自然環境の中で育まれてきた，人々の風土観と各民族の生活様式を見直すことによって，今後のネパールの発展と環境保全の行方を模索することができると考える。

引用文献

石井ほか（1990）：民族.石井溥編『もっと知りたいネパール』弘文堂，pp.96-169

石井溥（2003）：『ヒマラヤの「正倉院」―カトマンズ盆地の今』，山川出版社，174p

井上恭子（1990）：経済.石井溥編『もっと知りたいネパール』弘文堂，pp.73-95

久馬一剛編（1998）：『最新土壌学』，朝倉書店，216p

小山正忠・竹原秀雄（1996）：『新版標準土色帖』，日本色研事業株式会社

立川武蔵（1987）：『曼荼羅の神々―仏教のイノコロジー』，ありな書房，208p

富岡儀八（1983）：『塩の道を探る』，岩波書店，228p

成瀬敏郎（2006）『風成塵とレス』，朝倉書店，174p

成瀬敏郎（2007）：『世界の黄砂・風成塵』，筑地書館，197p

野津治仁（2003）：『旅の指さし会話帳 25 ネパール』，情報センター出版局，128p

古川彰ほか（2000）：森の利用の変化.山本紀夫・稲村哲也編『ヒマラヤの環境誌―山岳地域の自然とシェルパの世界』八坂書房，pp.275-294

森田宏・森田かとり（2001）：『ネパール小辞典』，紀伊國屋書店梅田本店総合印刷コーナー

安田喜憲（1996）：『森のこころと文明』，NHK 出版，272p

結城史隆（2000）：多民族国家ネパール，山本紀夫・稲村哲也編『ヒマラヤの環境誌―山岳地域の自然とシェルパの世界』八坂書房，pp.57-70

和辻哲郎（1979）：『風土―人間学的考察』，岩波書店，299p

Bista.B.B（1982）：『ネパールの人びとⅠ』，古今書院，220p

Bista.B.B（1983）：『ネパールの人びとⅡ』，古今書院，208p

FAO and UNESCO(1977)，『SOIL MAP OF THE WORLD』

Hagen Toni（2000）：『ネパール』，白水社，254p

Changes of Lifestyles in urban and rural areas , the central region of Nepal

NISHIDA　Hiroko

Key Words: Himalayas Mountains ， Middle Mountain ,Tarai ,Kaathmandu ， Tibet, India